

自立高齢者、要支援・要介護高齢者における自律性の総合的検討
-社会的活動参加者、通所介護利用者の自律的動機づけに着目して-

平成 28 年度

堀口 康太

筑波大学大学院人間総合科学研究科
生涯発達科学専攻

本研究は自立高齢者、および要支援・要介護高齢者を対象として自律的動機づけ(autonomous motivation)という共通の枠組から身体機能の異なる高齢者の自律性(autonomy)を総合的に検討した研究である。

生活の中で自律性を発揮することは、身体機能に障害がなく自立していても、日常生活を送るのに支援や介護が必要な状態においても重要なことである。特に近年の地域包括ケアシステムの中では、年老いても住み慣れた地域で生活していくことを支援するために、老年期全体を視野に入れ、高齢者の生涯発達を支援する必要がある、身体機能の異なる高齢者の自律性を総合的に検討することは、地域包括ケアシステムの中で自律性という観点から高齢者の生涯発達を支える実践に役立つことが期待できる。

身体機能の異なる高齢者の自律性を総合的に検討するために、老年期における自律性研究の課題を整理したところ、その課題を解決するために必要とされていることは、身体機能に関わらず共通しており、それは3つの点に整理される。第1の共通点は、「要支援・要介護高齢者、自立高齢者それぞれが置かれた社会的背景、発達課題を考慮した研究が必要とされていること」、第2の共通点は「第1の共通点を考慮して、自律性を尺度項目として想定するなど、自律性を測定可能なものとして実証研究を展開していくこと」、第3の共通点は、「自律性に関連する要因の検討を進めていくこと」である。この3つの共通課題を解決できる枠組が、高齢者の自律性を総合的に検討できる枠組であり、本研究では、自律的動機づけをその枠組として位置づけ、研究を展開する。

本研究は研究1から研究7までで構成され、研究1から研究4が自立高齢者を対象とした研究であり、研究5から研究7が要支援・要介護高齢者を対象とした研究である。自立高齢者においては、社会的活動参加者を対象とし、要支援・要介護高齢者においては、通所介護利用者を対象としている。本研究は、この2つの異なる対象に対して、3つの共通課題にほぼ対応する3つのフェーズ(段階・局面：以下フェーズという)ごとに研究を展開する。第1のフェーズでは、高齢者の自律的動機づけの特徴を検討する(研究1, 研究5)。第2のフェーズでは、高齢者の自律的動機づけに関連する要因を検討する(研究2, 3, 研究6)。第3のフェーズでは、高齢者の自律的動機づけとwell-beingの関連を検討する(研究4, 研究7)。

研究1では、自立高齢者における社会的活動への自律的動機づけの特徴を検討するために社会的活動参加動機づけ尺度を作成した。自立高齢者の社会的活動参加動機づけは、「自己成長の追求」、「自己の発揮志向」、「周囲への貢献希求」、「他者への同調」、「喪失の制御」の5つから構成され、前者3つが自律的動機づけ、後者2つが他律的動機づけであった。特徴的な自律的動機づけとして、「周囲への貢献希求」が抽出され、老年期の発達課題を反映した他者・社会志向的な自律的動機づけとして位置づけられた。また、「喪失の制御」は活動的な生活を送ることを望ましいこととする信念体系(busy ethic)に影響された老年期特有の他律的動機づけであることが示唆された。

研究2と研究3では、自立高齢者の社会的活動参加動機づけに関連する要因を検討した。先行研究を参考にして、「他者との関係性」、「価値志向性・生活史」を関連要因として設定し、動機づけとの関連を検討した。分析の結果、「他者との関係性」については、「活動内の仲間関係」と自律的動機づけの関連は安定して認められたが、「配偶者からの活動サポート」は、男性においては、自律的動機づけと正の関連を示したが、女性においては、他律的動機づけと正の関連を示すなど、家族からの活動サポートや家族との関係性は、性別や年齢によって、自律的動機づけとの関連の仕方が異なることが特徴的であった。「価値志向性・生活史」との関連については、価値志向性が明確であるほど、活動に対して自律的に動機づけられる傾向は男女共にほぼ共通した結果であること、高齢者が社会的活動へと自律的に動機づけられるためには、その活動が若い頃にも取り組んでいた活動内容であることなど、高齢者自身の「価値志向性・生活史」と活動への取り組みの間

につながりのあることが、高齢者の社会的活動への自律的動機づけに影響していることが示唆された。

研究 4 では、社会的活動参加動機づけと well-being の関連を横断的・縦断的に検討した。横断的検討においては、自律的動機づけは well-being(自己存在の意味の認識)と正の関連を示し、動機づけの個人差を考慮した動機づけパターンごとの分析においても、活動への動機づけが自律的なパターンの人ほど、well-being が高かった。ただし動機づけパターンの分析においては、自律的動機づけと他律的動機づけの両方が相対的に高い「両価的志向」群が抽出され、「両価的志向」群は well-being も高く、ill-being(生きがい阻害感)も高いという特徴をもち、個人の中でどちらとも割り切れない状態を示していた。縦断的検討においては、自律的動機づけが well-being(ikigai9)と共変関係を示し、他律的動機づけが ill-being(生きがい阻害感)と共変関係を示すことは横断的検討と共通した結果であった。併せて自律的動機づけの上昇と低下に影響する要因を検討したところ、「活動内の仲間関係」が良好になるほど、「自己成長の追求」が上昇する確率が高くなった。実際の活動の中で「活動内の仲間関係」を良好にするような介入が自律的動機づけを高め、結果、高齢者の well-being の向上へとつながることが示唆された。ただし、他律的動機づけとして位置づけられた「喪失の制御」が well-being, ill-being の両方と共変関係を示していることなど、仮説と合致しない結果も一部示された。

研究 5 では要支援・要介護高齢者の通所介護利用動機づけ尺度を作成した。尺度は「他者とのつながりからの獲得」、「身体機能の向上志向」、「活動性の低さの補償」、「不安・孤立状態の解消」、「周囲の人から勧め」という 5 つの因子から構成され、前者 4 つが自律的動機づけ、後者 1 つが他律的動機づけであった。「他者とのつながりからの獲得」は自立高齢者における「周囲への貢献希求」と同様に老年期に特徴的な他者・社会志向的な自律的動機づけであり、「身体機能の向上志向」、「活動性の低さの補償」や「不安・孤立状態の解消」は要支援・要介護高齢者が「維持・制御」といった方略を通して、喪失への適応(大川, 2011)という発達課題に対処しようとしていることを示す、要支援・要介護高齢者特有の自律的動機づけである可能性が示唆された。

研究 6 では通所介護利用動機づけに関連する要因を検討した。研究 6 では利用者と職員双方への面接調査を通して、特に通所介護における「他者との関係性」

と「生活史とのつながり」に焦点化した質的分析を実施した。分析の結果、通所介護に対して自律的に動機づけられている利用者は通所介護の中で、職員や他の利用者とのつながりを感じ、通所介護で行う活動と自らの人生や過去に取り組んだ仕事とのつながりも感じていた。そのような利用者におけるつながりの認識は、職員が行う「他者とのつながりの支援」や「利用者の人生と通所介護をつなぐ支援」から生じてくる可能性が示唆された。つまり職員からの《つながりの支援》が利用者の生活と通所介護の《新しいつながり》を形成し、利用者が通所介護を人生の一部として引き受けた結果、利用者は通所介護に対して自律的動機づけられると考えることができた。

研究7では、通所介護利用動機づけと well-being の関連を検討した。要支援・要介護高齢者の well-being を測定するために平穏感を well-being の指標として追加し、男女別に動機づけと well-being の関連を検討した。男性においては研究5で自律的動機づけとして位置づけられた動機づけは概ね well-being と関連していた。一方で女性においては自律的動機づけと well-being の間に男性ほど強い相関が認められなかった。したがって、自律的動機づけと well-being の関連については、仮説と合致する傾向は示されたが、今後さらなる検討が必要であることが示唆された。

以上の結果を受けて、身体機能の異なる高齢者の自律性を自律的動機づけという枠組から検討した本研究の特徴的結果をフェーズごとに分けて整理する。

第1のフェーズ、自律的動機づけの特徴の検討においては、「他者・社会志向的な自律的動機づけ」が老年期に特徴的な動機づけであり、身体機能の低下によって、「周囲への貢献希求」という貢献的特徴をもった動機づけから「他者とのつながりからの獲得」という享受的特徴をもった動機づけへと変化する可能性が示唆される。そして、自立高齢者を対象とした研究で抽出された「自己成長の追求」のような自己志向的な自律的動機づけの特徴は、身体機能の低下に伴って「獲得」を志向したものから「身体機能の向上志向」のような「維持・制御」を志向した動機づけへと変化していくことも示唆される。

第2のフェーズ、自律的動機づけに関連する要因の検討においては、「他者との関係性」や「価値志向性・生活史とのつながり」が自律的動機づけの関連要因として位置づけられ、身体機能の違いによる自律的動機づけの特徴の違いに関わら

ず、「つながり」が自律的動機づけに関連する要因として共通していることが特徴的な結果である。

第3のフェーズ、自律的動機づけと well-being の関連においては、身体機能に関わらず、自律的動機づけによって活動に取り組むことは概ね well-being を促進することが示唆された。しかし、自律的動機づけが well-being に関連しない場合も認められたことから、今後も検討を重ねていく必要がある。

自律的動機づけに関連する要因や自律的動機づけと well-being の関連においては、因果関係の検討が不十分であるという課題は残されているものの、自立高齢者、要支援・要介護高齢者の自律性を自律的動機づけという枠組から総合的に検討することで、身体機能の違いに関わらない自律性の共通点・相違点が確認され、関連要因もほぼ共通していることが示された。また、自律的動機づけは、他律的動機づけにも着目することができるため、自律-他律の両側面から高齢者の自律性を実証的に検討することができる利点を有している。こうした結果からも、自律的動機づけは高齢者の自律性研究における共通課題を解決することができる総合的な枠組として位置づけられるのである。

自律的動機づけという身体機能の違いを超えた共通の枠組を用いて、高齢者の自律性を総合的に検討できるようになることによって、もたらされる実践的示唆としては、以下の3点が挙げられる。第1は、高齢者の自律性を支援する際に分かりやすい枠組を提供し、高齢者の自律的動機づけを向上させるというように支援の的が絞れること、第2は、社会的活動から通所介護への活動の移行に際しても、自律的動機づけを促進するという共通の視点から、高齢者の生涯における発達の連続性を支援し、地域の中で自分らしく生活する地域包括ケアの実践を支える枠組を提供すること、第3は、自律的動機づけという枠組から高齢者個人の視点に迫り、高齢者個人の視点を政策などに反映することである。したがって、本研究は高齢者の視点を大事にし、地域で包括的に高齢者を支えていくために寄与する研究ともなりうるのである。